令和6年度第3回公立大学法人福知山公立大学評価委員会 議事録概要

1 日 時 令和6年8月5日（月）13:30～14:40

2 場 所 福知山公立大学4号館4階会議室

3 出席者

委員	(リモート参加) 青山委員長、大久保職務代理 (会場参加) 菊田委員、藤原委員、山口委員
福知山市	田村室長、山中課長、足立課長補佐、塩見主査、吉田職員
福知山公立 大学	川添学長、西田副学長、倉田副学長、岸本事務局長、内田次長、小林課長、 荻野課長、竹元課長補佐、杉本主事

4 会議概要

	議題・報告事項	内容
1	【議題】 令和5年度に係る公立大学法人福知山公立大学の業務実績に関する評価結果について	評価委員会での意見交換。最終評価の決定。
2	【報告】 公立大学法人福知山公立大学財務諸表承認及び剰余金の使途について	事務局から【資料4】により財務諸表の承認及び剰余金の使途における今後の取扱いの説明。
3	【その他】 公立大学法人への報告と学長からの意見	評価結果について、評価委員長から学長へ報告。

5 会議内容

議題 令和5年度に係る公立大学法人福知山公立大学の業務実績に関する評価結果について

(委員)

- 前回協議した業務実績の評価に対し法人から意見書の提出があったため、説明をお願いします。

(法人)

- 我々の自己評価をほぼ認めていただいたことに感謝申し上げる。
ただ項目番号57番と66番は意見書を提出したが、66番については評価の変更をお願いしたい訳ではなく自己評価に至る背景の説明を書かせていただいた。
57番の教員評価については自己評価で4としたことを適切ではないとの判断をされたことに対して意見を書かせていただいた。
令和5年度は教員評価制度の規程案を検討することを目標として掲げており、目標と

実現の対比で言えば目標を超える成果をあげたと認識している。試行を超えて本格稼働までにはまだ多くの調整が必要であるが、そこに至る過程で言えば4という自己評価は無理がないと改めて主張させていただきたい。

処遇への反映という点については確かに本年度に検討しなければならないが、昨年度の対比でいえば目標以上の成果があった。

(法人)

- 業務実績報告書に記載している目標の文言と実績との関係から4という評価は妥当であると考えている。また処遇への反映についてはかなり慎重な対応を取っている。反映しないと断言している訳ではなく学問分野の多様性をご理解いただきたいと思います。思いあえて意見書を提出した。

【法人退室後】

(委員)

- 項目番号 57 番の教員評価制度は当然実施しないとイケない。
法人からは年度計画との関係性で自己評価を4とした旨説明があったが、検討すると計画に書いていたものを検討、試行したから4だという評価をすべきなのかということ判断する必要がある。それは中期計画6年の期間で最終は処遇反映まで持って行くという観点で評価する必要があり、かつて5段階評価であったものを昨年度から4段階評価に変え、3の評価でも順調に進んでいるという評価になったため4をつける根拠の判断基準が高くなった。

さらに法人の説明に、教員評価にあたり各分野が違うため同じ物差しを当てられない苦勞があるとあったが、複数学部を持つ大学にとって志願倍率や偏差値、就職実績等によって優劣が生じることは常であり、そこを乗り越えて制度をつくる必要があることは最初から分かっていることであるため、その観点で計画に対する評価の議論を進める必要がある。

項目番号 66 番については部署や職階のイメージを明確にしたが、それによって効果が上がったということになれば評価できたが、市民に対して明示的によくできたということが見えなかった。

(委員)

- 様々な分野の教員を評価することはその専門家でないと難しいが、京都府立大学ではその仕組みをつくり2年間の試行期間を経て平成25年度から全教員に対して評価を賞与に反映することをおこなっている。
今回、年度計画には教員評価について検討をおこなうとしか書かれておらず、年度計画の書き方が漠然としているだけでなく、十数年前から既に日本全国の多くの大学で教員評価の処遇反映はおこなわれていることであり、教員評価をおこなっただけであれば評価を4とすることに無理があると言わざるを得ない。

(委員)

- 全国の公立大学で教員評価制度自体を本格実施しているところは7割あり、評価の処遇への反映は別にしても、この中期計画期間中に評価制度自体を定着させていなければならない。

(委員)

- 57 番については3の評価であっても現状十分に出来ていないという評価ではないため3でよいかと思われる。
66 番は法人においても評価委員会の評価に準じるとのことであり、3の評価のまま
でよいと思う。

(委員)

- 57 番について、両学部の評価方法を導入し処遇に反映するということまでが中期
計画に掲げられていると理解していたが、今までの協議からもっと早く進めないとい
けないとの理解をした。そのため運用案を作成して試行を開始するところまでは
年度計画に書いておくべきと考え3の評価が妥当であると感じた。
66 番については特に意見は無し。

(委員)

- 57 番は中期計画の中で評価制度を形として作った部分は評価できると思うが、ほと
んどの大学が当たり前のように実施している状況を見ると現段階で4の評価は無理
があり、順調に評価制度を形にしたとのこと3の評価が妥当ではないかと思う。
66 番については改正をおこなっただけということ3の評価のままでいいと思う。

(委員)

- 十年以上前から文部科学省が教員評価制度の実施を促しており、かつ全国の大学で
も7割は実施している。給与に反映させるかどうかは別にしても、福知山公立大学と
してはもっと早くに試行しなければいけなかったと思う。年度計画にも検討するとい
う記載ではなく、この仕組みの中で実施する具体的な部分を提示することが必要
ではないかと思った。
項目番号 57 番については3の評価、66 番についても3の評価としたいがどうか。

(委員一同)

- 意義なし

(委員)

- 令和5年度の評価を本日で確定することができ感謝する。
この後法人への結果の報告をおこないたいと思う。

報告 公立大学法人福知山公立大学財務諸表承認及び剰余金の使途について

(事務局)

- 資料4のとおり財務諸表については適正に処理をされていることを確認したため承
認することとする。
- 剰余金については公立大学法人の経営審議会で「財務・経営努力の具体的な指標を作る
必要がある」との意見が出たこと、第1回評価委員会において「しっかり予算管理を
行うことを前提に目的積立金として認めてはどうか」「不当利益を上げているとは認
められないため、目的積立金として設備の増強や人員の増強に努めていただきたい」
との意見をいただいたこと、本日の最終評価が「A」で確定したことによる「公立大
学法人福知山公立大学の利益処分に関する基本的な考え方」を勧案して使途につい
て判断をしたい。

(委員)

- 財務諸表については承認するとのことで確認をお願いする。

【法人入室後】

(委員)

- 評価委員会での意見の説明をさせていただきたい。
- 総論的には評価委員全員が福知山公立大学の運営について高い評価をしている。特に情報学部や大学院を設置しただけに留まらず地域経営学部と協働で課題運営をしており、福知山モデルを推進していくうえで非常にしっかりした方向性が見いだせていることが高く評価できる。第2期中期計画期間はあと4年残っているが、ますます活動をブラッシュアップさせていただきたいと思っている。
- 冒頭に意見書の説明をいただいたが、その内容について5人の評価委員ともに現状維持の評価とした。他大学では教員評価を給与に反映させるシステムまで構築し実施しているところもあり、しかもそれが十年前には既にできている点を鑑み評価を3とさせていただいた。

(法人)

- 温かい励ましの言葉に感謝申し上げたい。福知山モデルは第2期の中期目標であるが、それを越えた長いスパンで実現のために本学には何が必要かを考えている。この地域のために、市民の皆さんのためであってよかった、或いはないと困ると思ってもらえるような大学になることを工夫しながらやっていかなくてはいけない。教員評価の問題については何らかの形を作り上げる必要があることは当然自覚しており、この評価制度が本質的にどのような意味を持ち得る制度なのか、また制度実施が本学の活動を活性化させることに繋がるような教員評価であって欲しいと考えており、これから検討し第2期中期計画中には少なくとも形にして実施に持っていきたいと思っている。

ご意見に感謝を申し上げたいと思う。

(委員)

- 最後に今年度の評価委員会の感想を委員からお伺いしたい。

(委員)

- ホームページや発行物、実績報告書から福知山公立大学の頑張りがしっかり表れていて敬意を表するしかないと思っている。単科の大学から現在の2学部1研究科体制へと大きく羽ばたこうとされている中でのご苦勞、またそれを乗り越えてこられたということを高く評価できると思う。一方で初年度に大学院で定員を確保できなかったことは課題として法人も強く認識されており、良い大学院生を確保されるものと思っている。当初から年度計画の曖昧さが随分指摘されているが、次の中期目標期間に向かって来年度にできる限り計画を練っていただき全部の項目で4の評価となれば大変な幸せであると思っている。ずっと応援しているのでしっかりやっていただきたいと思う。

(委員)

- 大学の事業が本当に活発に行われ、それが目に見える形で市民の目にも止まってきており、大学があることが心強くなってきている状況を実感している。特に企業や地

域との協働をよく目にしており、この活動を続けていくことにより大学の存在感が浸透していくと思う。他方、大学生の方々はこの大学のことをどう感じているかということが常に気になっており、現役大学生や卒業生の方々の声を大学運営に活かしていただき、評価にも盛り込まれてくることがあれば良いと感じた。

(委員)

- 情報学部が初めての卒業生を出されて優秀な実績を残された。また、まちの中においても学生をよく見かけるようになった。さまざまなお店でアルバイトとして働かれており、福知山公立大学生の存在が当たり前のような状況になっていることを大変うれしく思っている。このようなかたちで大学に関わらせていただいたことは本当にありがたく、一市民として大学にもっと関わり福知山のまちを良いまちにしていきたいとの思いで評価委員会に臨ませていただいた。力不足ではあったが何とかこの評価委員を務めることができ安堵しているところだが、次年度も真剣に取り組んでいきたい。

(委員)

- 私もこの評価委員会で福知山公立大学の取組を知る機会を与えていただいたことで、大学に対し親しみがこれまで以上に感じられるようになった。個人的にも大学が地域課題に取り組まれていることを1人でも多くの人に伝えたいと思っているが、市民目線で見るとまだまだ距離感があるように見え、大学の活動がまだまだ十分伝わっていない部分があり大きな課題であると思っている。学生の方々は非常にコミュニケーション能力が高く、全国様々な地域から福知山に来ていただいていることもあり、関わることによって勉強になることが多々あり、これからも大学を応援していくとともに、地域から愛される大学なって欲しいと思っている。

(委員)

- 福知山公立大学のパンフレットを見ると地域と一緒に溶け込み様々な活動をされており、それが他府県から学生を集められている要因であると思っている。これから重要なのは他府県から来た方々のネットワークをつくることであり、そのネットワークを生かした新しい活動ができると素晴らしいと思う。
また情報学部と地域経営学部が一緒になって活動をされていることはソーシャルイノベーションにとって大変重要であると感じている。課題解決のために新しい情報技術をうまく入れ込んで地域づくりをしていくことが重要であると考えているが、地域に根差していなければ意味がない。この福知山モデルがそのソーシャルイノベーションを実現するひとつの鍵になると思っている。
各委員のご意見のとおり評価委員全員が福知山公立大学の応援団であり、応援団としての役割はこれからもずっとさせていただきたいと思っており、今後も是非頑張りたいと思っている。